

続 教育長だより



鹿児島県三島村教育委員会
教育長

室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の多い鹿児島県で、鹿児島県小学校長会も務めた。

雄大な桜島を眺めながら、鹿児島市から出港したフェリーが2時間ほどゆっくりと錦江湾を抜けて、さらに1時間ほど進むと小さな島が現れます。まるでゴルフ場を切り取ったようなその島に近付いてみると、島を覆っていた緑は芝ではなく竹だったことが分かります。名は体を表すのとおり「竹島」は、三島村の入口の島です。竹島から西に14km進むと「硫黄島」、さらに36km離れて「黒島」が現れます。正に看板に偽りなし。硫黄島は火山が火を噴き数多くの伝説が残る島。黒島は豊かな森林に覆われ「ミニ屋久島」とも称されます。地図をよく見ないと見落としてしまうようなこの3つの島を合わせて三島村です。

全く違う表情を見せながら横にかわいく並ぶ3つの島ですが、これらの島は日本で最も新しい巨大噴火の生々しい痕跡であり、日本ジオパークに登録され、独自の文化・信仰形態・伝説が語り継がれています。人口は400名足らず。交通手段は週4便の定期船のみ。村役場や教育委員会が島内ではなく鹿児島市にある…など、なかなか皆さんにはにわかには想像しがたい村ではないでしょうか。

子どもたちは、村内4つの義務教育学校に約80名の児童生徒が通っています。全児童生徒の約40%は全国各地からやってきた山村留学生、約30%は教職員の子どもたちです。

この小さな離島へき地の村の教育長を務める私が、「教育長だより」を1年間連載することとなりました。ある意味シュールともいえる我が村の状況を考えると皆さんの参考になるものはないのかもしれないかもしれません。しかし、この村の教育づくりに当たっていると村は国の縮図であるということをつくづく感じる時があります。

日本の原風景や文化が残る離島における教育には、「教育の原点」があるとよくいわれます。私がいつも先生方にお話ししているのは、「小さな学校で子どもたちに力をつけることができたとしても、大きな学校でできるとは限らない。でも、小さな学校の子どもたちにすら力をつけることができなかつた教師が、大きな学校の子どもたちに力をつけることができるだろうか。」ということです。このことが、離島や山村の小さな学校が「教育の原点」といわれる一つの真理ではないでしょうか。

産業の発展が困難な離島の村の未来を拓く一筋の光は「教育の島」にすることです。まあ御託を並べずともこの村の学校教育づくりは面白いのです。このワクワク感をお届けできたらと思っています。

